



## ワークショップE 「学力調査から読書指導を考える」

高木まさき(横浜国立大学)

このワークショップでは、今年4月24日に実施された「全国学力・学習状況調査」を実際に解き、問題から見えるこれからの読書指導の課題や子どもたちに求められていく読む力とはどのようなものなのかを考えてみました。さらには、「読む」ということ、読解と読書の関係等についても探っていきました。

### 読書(Reading)とは

最近「Reading」という言葉がよく聞かれる。「Reading」＝「読書」、「読解」といった言葉で訳されるが、この言葉が指し示すものは、単なる読み取りだけではなく、もっと多様で幅広い読みなのである。同様の読みについて、今年の全国学力調査に出題された素材や問題を通じて、どのような読みが今後望まれているのかを探ることができる。また、それにともない、今後の読書指導が抱える課題についても考えていくことができる。

これらのことから、今回は「全国学力・学習状況調査」をもとに読書指導について考えていくこととする。

### 全国学力・学習状況調査について

今年4月24日に実施された「全国学力・学習状況調査」では、小学校第6学年の児童と、中学校第3学年の生徒を対象に、それぞれ国語と算数・数学が出題された。出題内容は、「主として「知識」に関する問題(以下A問題)」と、「主として「活用」に関する問題(以下B問題)」からなる。すべての問題に共通する特徴として、日常生活の中にあるさまざまな素材を出題の題材としていることや記述式問題の多さが挙げられる。

本大会開催の直前である10月24日にその結果が公表され、「知識・技能を活用する力に課題がある」とされた。公表翌日の25日づけの朝日・毎日では、「結果分析が不十分であり、毎年実施する必要はない」、読売・産経・日経では「結果をさらに分析し、指導改善にいかすべき」と立場が分かれた。

そもそも全国学力調査の実施の背景には、従来からの学力低下論に加え、2003年に行われたPISA調査において日本の読解力低下が指摘されたことがある。

しかし実際には、例えば調査翌日の神奈川新聞では、その問題の内容自体が持つ教育の現状に対する「批評性」や「学校評価」の今後等についてみることなく、この調査の実施によって過度の序列化・競争を危惧する内容を掲載していた。

まず問題そのものをきちんと分析し、調査問題が訴えている現場へのメッセージを正しく受けとめることが大切ではないか。

### 昭和41年の全国学力調査問題を解いてみる(15分)

学力調査の実施は今年が初めてのことでなく、以前にも文部省による全国学力調査が行われていた。では、以前の調査では、どのような素材をもとにどんな出題がなされていたのか。15分程度



時間をとり、実際に参加者に解いてもらった。

ピックアップしたのは、昭和41年全国小学校学力調査のうち、小学校第5学年を対象とした国語問題から説明文、同年全国中学校学力調査のうち、中学校第3学年を対象とした国語問題から説明文。設問は小学校、中学校ともにすべて選択式であった。

まず、小学5年生の説明文は、「鳥の渡り」に関する内容のものであった。設問は、接続詞の選択、文脈の中の語句の意味や用法、段落のはたらきや文章の要旨を問う問題である。

一方の中学3年生の説明文は、「コミュニケーションと文字」に関する内容であった。設問は、小学校と同様に、接続詞の選択に加え、論の展開を選択するもの、文章の要点を選択するものといった内容である。

現在行われているテストなどでは、どれも非常に見慣れた出題内容だが、例えばここでは示していないが、昭和37年度の調査問題に出された登場人物の心情を尋ねるといった出題内容は、当時新しく開発された問題として注目された。このことから、現在ある出題内容は、「当然としてあるもの」ではなく、いずれも先人達によって作り上げられてきたものだといえる。

問題を解き終えたあと、答え合わせを行い、次に各問の通過率(正答率)を発表した。当時の通過率は意外にも低く、小学5年生で40.7%、中学3年生で41.5%であった。当時の問題と現在の問題とでは、難易度も含め、問題の質が全く異なることが明らかである。

このように、問題というものは、問題自体の難易度を問うのではなく、出題方法や内容の新しさに注目して見るべきではないだろうか。

また当時、都市部(商業市街地)と農村部との通過率の差は10ポイント以上あり、それが問題となった。当時と比較すると、今年の学力調査における地域差は、非常に微少なものになったといえる。

### 平成19年4月の全国学力調査問題を解いてみる(15分)

それでは、今年実施された学力調査には、どのような読書材が使われ、どのような出題がなされたのか。小学校・中学校それぞれのB問題を参加者に解いてもらった。

取り上げたのは、小学校6年生の問題からは、資料作成、読み比べ、情報の読み取りに関するもの、中学校3年生の問題からは、資料の発表、文学作品の評価、情報の読み取りに関するものである。

小学校の資料作成の問題は、紙・板紙の生産量に関するグラフをもとに、資料に数値を当てはめたり、傍線部分の根拠を探したりするといったものである。読み比べには、二人の児童の感想文を用い、情報の読み取りにはスーパーの広告を取り上げている。

一方の中学校の資料発表に関する問題では、生徒が調べた資料と発表原稿をもとに、資料の提示箇所を選択したり自分の考えを書いたりする問題、また文学作品では芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を取り上げ、朗読の仕方に関するものや、第三の場面の有無に対して自分で評価させ、考えを記述させる問題が出題された。情報の読み取りは、書店等で見受けられる複数の広告カードから、共通点と相違点を見つけ、説明させるといった内容であった。

問われている事柄自体は、それほど難しくはない。だが、素材だけを挙げてみても、資料や文学作品の他、グラフ、絵や数字の入った広告、写真の入った表など、子どもたちの生活の中にある、実に多様なものを取り上げられている。読み、比べ、情報を取り出し、違いを説明し、自分の考えを述べるといったように、実に多様な読み方も要求されている。日常生活にはありふれた素材、読み方であるけれども、普段から自覚的な指導がなされていないと、非常に抵抗感のある問題であったといえる。

### 二つの学力調査問題を比較して分かること

昭和41年と平成19年の全国学力調査を解き比べて分かることは、この両者が求めている力、即ち方向性が全く異なるということである。

読むことに着目してみると、昭和41年の問題では、読みの対象は、一つの大問について一つずつの物語文と説明文に限ら

れ、「テキスト内に閉じた読み」ということもできる。

一方、平成19年の問題では、先にも述べたように物語や説明文に加え、グラフの読み取りや広告、ホームページといった生活に密着したものから幅広く、かつ多くの素材を用い、必要とされる読み方も、資料と文章を関係づける読み、比べ読み、評価的(批評的)読み、情報の取り出し、表現のしかたの読み取りといったように、「テキストから開かれた読み」ということができる。

PISA調査や海外の読書力調査においても、読みの対象は物語、説明文のほか、新聞や図表、ホームページと幅広く、その読み方も選書や解釈、評価的な読みなど、分析的読解だけでなく多様な読みを求めている。

### 「読書生活」をデザインする力



実際の生活の中には、さまざまな読みの素材があふれている。文章材としても物語、説明文、解説文、批評等々あり、さらには新聞、ホームページ、

雑誌、広告などは文章と図表や写真を的確に絡めて読み取らなければならない。オーストラリアには、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」に加え、「Viewing」即ち「見ること」が領域としてあるほどである。

改めて読書生活を再考し、「読書」を見直すことが必要である。即ち、旧来の読解読書、娯楽読書、情報読書といった単純な二分法からの脱却を図り、情報化社会の現実に応じた「読書生活」をデザインする力を育むことが大切である。

今回の学力調査が示唆するのは、このような多様な素材、多様な読み方が必要であるということなのではないだろうか。

従来の読書に比べ、今後はもっと柔軟に読書生活を作り直すことが必要である。種々のジャンルの本や、さまざまなメディアを通じた情報などを、計画性を持ちながら、取り出し、批判、比較、評価して読む、そうした力を身につけることが重要なのである。その一方で、一冊の本を読み通し、粘り強く思考することができる力も大切である。教える側である私たち自身も、「読書生活」をデザインしつつ、子どもたちに必要な力を確かに身につけられる、「開かれた読み」へと発展していくよう、今年の学力調査を手がかりに授業改善が図られればと思う。